

「今後の県立高校に関する意見交換会（第1回）」記録要旨【両磐ブロック】

平成 27 年 6 月 17 日（水）

一関地区合同庁舎 3 階大会議室

【一関市花泉 参加者】

- ・資料は見やすいが、高校再編計画についてもっと具体的な内容にしてほしい。

【 県教委 】

- ・高校再編における具体的な学校や学科の配置については、このような意見交換会での意見を伺いながら考えていきたい。今回は基本的方向の改訂について主に説明するものであるため、具体的な再編計画までの内容には至っていないことに御了解願いたい。
- ・今後は論点をわかりやすくして、多数の意見をいただけるように意見交換会を運営していきたい。

【一関市 参加者】

- ・行政的な考え方で学校の生徒数を決めるために、県民の意見を聞くというのはいかがなものか。知事はどのような指示をしているのか。

【 県教委 】

- ・高校再編のあり方の検討にあたっては、県教育委員会で検討した上で、総合教育会議において知事と意見交換をしながら進めている。再編計画については、県民との意見交換を丁寧に行った上で進めるように知事から指示されている。県教育委員会としても地域の方々に現在の状況を御理解いただき、今後の対応について協議しながら計画を作っていくと考えている。

【一関市 参加者】

- ・県立高校は授業料が無料となっており、県内にある 13 校の私立高校の保護者は県民税を納め、さらに授業料を納めているため、格差があるのではないか。

【 県教委 】

- ・県立学校では、3 年間について授業料の支援があり、現在は授業料の実質負担は無くなっている。私立高校においても同様に支援がされ、負担軽減されている。このような支援体制は県ではなく、文科省が国の制度に基づいて進めているものであることを理解いただきたい。

【奥州市前沢区 参加者】

- ・学級規模として 4～6 学級が望ましいとあるが、沿線沿いでは可能かもしれないが沿岸部では難しいと思うので地域性を考慮した再編を行ってほしい。
- ・中学校で自分の将来の方向をしっかりと決めている生徒は半数にも満たない。実際には高校に入ってから自分の進路を決める生徒が多いため、そのようなことに対応できる進路選択が可能な小中規模の普通高校の役割は大きいと思うので存続の方向で考えてほしい。

【 県教委 】

- ・生徒の進路希望の実現や多様な経験を積むというような観点から学校規模を 4～6 学級を基本とするとしている。
- ・3 学級以下の小規模校が増加していること、特長のある実践活動等の実績も踏まえ、学校規模に幅を持たせるために「原則」としている。

（次頁に続く）

- ・社会に出て行く前段階で、生徒がより多くの友人、教員とふれあい、切磋琢磨し、学力を向上させるとともに、社会性や協調性を育てていくためには、一定の学校規模が必要であるという観点から4～6学級を望ましいとしている。科目ごとの専門教員の配置が可能で生徒の能力、個性を最大限に伸ばすための教育課程の選択が可能になる点、センター試験に対応する希望に応じた専門性の高い指導が受けられる点、運動部の主な団体競技を男女別に開設することが可能になり、顧問の配置についても専門性の高い教員を配置できる点も考慮している。
- ・小規模校においては、生徒一人ひとりに対するきめ細やかな指導や、地域との交流による進路や部活動の成果等の実績をあげているところもある。しかし、教員の配置、進学から就職までの多様な進路希望への対応、教育内容の質の保証、開設できる部活動が限られる等の課題がある。

【一関市花泉町 参加者】

- ・学校の生徒数の減少には現場の教員の責任もあるのではないかと。私立の一関学院高校は全国的に有名であり、これは教員の努力によるものであると思う。県立高校の職員においては、より一層の努力が必要ではないか。

【一関市 参加者】

- ・生徒のニーズを考えると旧一関市内の高校の定員を大幅に削減することは難しいかもしれないが、そうすることによって、花泉高校を選択する生徒を増加させる方法もあるのではないかと。
- ・旧一関市内に県立高校が3校あるのは過剰ではないか。一関工業高校は生徒数も学級数も減っているが、県全体で工業高校を整理統合していく必要があるのではないかと。そのような検討が現在行われているのか。

【 県教委 】

- ・中心部の進学校の募集定員を減らし、周辺の高校へ生徒が入学するようにしてほしいという意見を踏まえ、平成17年度に学級数調整をした例がある。学級数を減らした進学校では多数の不合格者を産んだが、周辺の高校は欠員が生じ、結果として私立へ流れたということもあった。そのため学級数調整は慎重に進めなければならないと考えている。
- ・工業科単独校は現在7校あり、農業や商業等の他の専門高校に比べ、やや多い状況にある。今後、工業系の学科についても、意見を伺いながら検討していかなければならないと考えている。

【一関市 参加者】

- ・核家族化が進んでいることが少子化につながっているのではないかと。子育てのために母親が仕事を辞めなければならないとなり、複数の子どもを持たないのではないかと。
- ・生徒が夢や希望を持てるように、日本人の良さや魅力をもっと生徒に伝えてほしい。

【 県教委 】

- ・生徒たちが夢を持って社会に羽ばたけるように、充実した教育を展開していきたいと考えており、実行していきたい。

【一関市 参加者】

- ・学校存続のために、この学校はこのような特色を出した方がよいだとか、こんなことをしなければならぬというような具体策や県の指針を出してほしい。それに対して地域住民が検討できるようすれば、意見交換会が充実するのではないかと。

(次頁に続く)

【 県教委 】

- ・県立高校だけの取り組みでなく、市町村や地域住民の支援がなければ質の高い教育や地元を愛する人材を育成することは難しいため、どんな方法で学校を活性化していくのか、知恵を出し合いながら進めたいと考えているので是非、沢山の意見をいただきたい。

【一関市花泉町 参加者】

- ・旧一関市内には高校が多すぎるのではないかと。花泉の住民は花泉高校へ進むような中高一貫教育校を考えてみてはどうか。

【 県教委 】

- ・中高一貫教育校については、併設型の一関一高から今年初めて卒業生が出たので、この状況も確認しながら方向性を考えているところである。中高一貫教育校には併設型と連携型があり、中高二で県、市町村と設置者が異なることから、十分な意見交換が必要と考えている。

【 県教委 】

- ・中学生と高校生と一緒に学ぶ中等教育学校は岩手県にはない。中学校から高校に入るときは高校を選択できる制度になっていることを理解いただきたい。

【一関市 参加者】

- ・両磐ブロックには一関高専や、私立高校が2校あること等、他の地域とは実情が異なるため、地域性を考慮した再編計画をお願いしたい。
- ・私立高校は生き残りをかけて生徒募集をしているので、県内各地の高校の充足率が悪い中、定員以上の合格者を出すことは避けてほしい。
- ・県の再編計画は、私立高校の状況も踏まえながら進めてほしい。

【 県教委 】

- ・現在、検討を進めている再編計画は県立高校に関するものであるが、県教委と私立高校の代表者との意見交換を定期的に行っている。今回の意見交換会の状況も伝えながら、私立高校の代表者と意見交換をしていきたい。

【 県教委 】

- ・定員以上の合格者を出しているとの指摘だが、無闇やたらに合格者を増やすことはない。定員40名に基づいて合格者を出している。合格させた以上、教育の質を保証する必要があるため、実態としては41名を合格者とする場合はあるが、合格者は原則40名としている。

【一関市 参加者】

- ・教員の配置人数の基準を変更することは可能なのか。今の基準での教員配置が不可能であれば、配置人数の基準を変えながら小規模校の質を保つ方法はできないのか。

【 県教委 】

- ・教員配置について小中学校では児童・生徒数を基準に国の財政措置がなされているが、高校では募集定員を基準として財政措置がなされる。県として、仮に少人数学級を導入する場合には、国からの財政措置が保障されていないので、その分を県でどのように負担していくのかということも考慮した上で検討していかなければならない。
- ・現在の教員配置では、特に県北、沿岸においてより多く加配が行われている。国では小中学校も含めた震災にかかる加配の取扱いをどうするのかという検討もされており、今後の動向もみながら進めていきたい。

(次頁に続く)

【 県教委 】

- ・小中学校と高校とでは教員の配置基準が異なっている。高校の場合、1学年5クラス規模の学校を35人学級にすると配置できる教員の数は6人減る。その減った6人分について何らかの形で補填しなければならない状況にある。

【一関市 参加者】

- ・原則4～6学級を基準とするとあるが3学級以下が4割もある現状をふまえて、3～5学級を原則とし、3学級規模を維持していくようにしてはどうか。
- ・現状を考えると学区制は必要ないのではないか。なぜ、普通科だけ学区外受入れを10%にしぼらなければならないのか、全県一学区を検討してほしい。

【 県教委 】

- ・原則として4～6学級としているのは、大学進学への対応も考えるとセンター試験にも対応する生徒の進路実現等も考慮し、学校規模を考えている。
- ・現在は9ブロックで8学区がある。特定の高校へ過度の集中を避けること、長距離の通学の負担の軽減を考慮して全日制の普通科に学区制を導入している理由である。学校選択の機会の拡大ということで学区制の撤廃を求める声があることも承知しているが、一方で、過度な受験競争の抑制や地区外に生徒が流出することを懸念することで学区を求める意見等、様々な意見があると認識しているところ。来年度から入試制度の一部変更もあるので、入試選抜の動向も確認した上で再編計画とは切り離して学区のあり方を考えていく必要があると考えている。

【一関市 参加者】

- ・非常勤講師の配置や、加配等の工夫をすれば対応は可能ではないか。
- ・4～6学級が望ましい規模とあるが、岩手県は広い県土を考慮に入れて再検討してほしい。

【 県教委 】

- ・講師で対応できるところもあるが、教員をしっかりと配置しなければならないところもあるので十分な吟味や検討が必要である。
- ・県立高校は最大で7クラスであるが、全国的には最大10クラスの県が多数あり、岩手県の学級規模は既に十分小さくなっている。科目の選択肢を十分確保するために4クラスは必要であるとしているが、本当は6クラスでも足りない。実際に県内の7クラス規模の学校でも全ての科目の教員を自校でまかなっている学校はなく、兼務等の形で対応している。兼務の形では部顧問や学級担任ができないので弊害があることを理解してほしい。加配を行う場合でも予算の関係があることも理解してほしい。この点をどう解決するかが重要である。

【一関市花泉 参加者】

- ・意見交換会の開催についての案内はどのように行っているのか。
- ・花泉高校の募集定員が平成27年度は1クラスであると聞いた。平成28年度は花泉中学校の卒業生が増えるため、40名の定員であると、花泉高校への入学を勧めて不合格者がでると具合が悪い。定員は増えないのか。

【 県教委 】

- ・意見交換会の周知の方法としては、市町村教委を通じて小中学校の保護者への周知、県立学校を通じて県立学校の保護者への周知をしている。マスコミへの情報提供もしており、新聞等への記事の掲載や県のホームページへの掲載もしている。

(次頁に続く)

- ・花泉高校の学級減については、昨年10月の教育委員会議の決定では、27年度入試における入学志願者の状況を見て判断することとし、27年度入試における入学志願者は37名であったため、27年度の定員を1学級にしたところである。来年度の募集定員についてはまだ決まっておらず、これから調整していくものであるが、基本的には、1学級での募集になると考えている。花泉中学校の卒業者が来年増えることは把握しているが、今年度の37名の入学者のなかで花泉中学校からは約2割程度の入学者という状況等も考慮しながら、今後、検討していきたい。

【一関市 参加者】

- ・小中高校の3人の子を持つ親であり、転勤の可能性のある職業である。そのため、県内9ブロックのどの地域に行っても進学や就職、それぞれの夢を叶えられるような学校をそれぞれのブロックに配置してほしい。